

飛耳長目〈第14回〉開催趣旨

日時	令和5年8月2日(水) 午前10時～
場所	安曇野市役所本庁舎 共用会議室305
テーマ	子どもの権利条約と不登校
参加者	ひらく ～あづみの不登校を考える親の会～ 3人

「ひらく」の活動紹介と子どものための居場所紹介冊子

参加者 不登校を考える親の会「ひらく」の紹介と、これまでやってきたことや今月予定しているイベントのことをお伝えしながら、親の会で様々な当事者の話を聞き、必要だと思ったこととお話したい。月1回、親の会を第4土曜日に新屋公民館で開催している。親同士が集まるとともに、子どもも来て楽しく遊んだりしている。学校から離れたときに親は孤独を感じたし、子どももそうは言わないが、やはりそう思ってしまうところもあって、孤独であっても孤立しないようにということで親の会を進めている。親はもちろん、祖父母が来ることもあったり、本人や支援する方が来ることもあり、毎回15名程の参加がある。いろいろな方に関わってもらって、不登校ってということについて知ってもらおう場にもしたい。『繋がる』『学ぶ』『伝える』という3つを柱にして活動している。

広く市民・社会に不登校を知っていただくために学習会をやっている。活動1年目に不登校を経験した人から見た親ってというのはどう見えたかを語るイベントをZoomで開催した。不登校を経験された方々が登壇し、北海道から沖縄まで約100人が参加してくれた。令和4年8月には、多様な学びや生き方を応援するために、元信濃むつみ高校の教頭先生・竹内忍さんの講演会を開催した。今年は8月26日に西野博之さんの講演会を開催する。西野さんは川崎市で「子ども夢パーク」という大人の制限を受けず子どもが考えて居られる場所を作っている方。ここは川崎市が主体になって作り、NPOが運営している。川崎市は1994年に子どもの基本条例を作っていて、西野さんの基本的な考え方にも子どもの権利条約がある。学校行っているか行かないか、障害の有無といったことに関係なく子どもなら誰でもいられる場所が必要と考えていて、我々も西野さんに学びながら、権利条約のことも学ぶため講演会をお願いしている。

不登校になって1番困るのが、親は働かなければならないのに子どもを置いて行けないとか、子どもも日中どう過ごしていいかわからないということ。不登校当事者の多くがこれらを解決してくれる居場所を手探りで探している状況のため、居場所の情報を集めた冊子「ここなら」を松本の親の会と一緒に作った。市や学校、医療機関に置かせてもらっており、新聞で取り上げられてからは県内各地からほしいという連絡が来た。今は支援者や学校から届けてほしいという希望の声が多い。

「ここなら」は実際に子どもや親が行ってみて実感としていいと思ったところだけを掲載している。行政が作ると「何でここを載せないんだ」「行政の窓口を載せなきゃいけない」という話になるが、知らないところを掲載したくない、実感をもとに掲載したい、ということでこども県未来基金と生活クラブから助成金をいただいて作った。情報を得たい人がいることを作ってみて改めて感じたし、親が「自分が何か悪いから子どもが学校に行けない」と捉えてしまうこともあり、学校が合わない子どもにとって安心できる場所がないといった課題や実態が見えてきた。

参加者 私も居場所を探して市役所等に行った時に一覧表をもらったが、連絡先がありすぎてどこから連絡すればいいかわからないし、細かいことがわからないからどこがいいのか判断できず探すのが難しかった。写真や施設のコメント、雰囲気載っている冊子はまさにほしかったもの。

参加者 冊子の挿絵もホームページの準備も、不登校の経験がある人たちが関わっていて、思いが詰まっている。3,000部印刷できたが配り切ったら終わり、増版したりホームページを作りたいと思っているが、親の会だけでは負担が大きく困っている。

市長 冊子作成にはいくらぐらいかかるか。

参加者 デザインから印刷まで3000部で20万円くらい。

不登校の子どもや親と話している中で出てきた声について

参加者 参加者からは、「学校へ連れてくれば何とか言われて、無理に連れて行ったら翌日部屋から出なくなった」「学校で落ち着きがないから医者診てもらった方がいいと言われたが、家では問題なく生活できる」といった声が出ている。また「出席数が少ないと高校受験時に困るから、『校門にタッチするだけでいいから』などと言われ、無理に連れて行こうとして親子関係がギクシャクし、学校に行けない状態が長引いたり、引きこもりになってしまったりする。その時の対応の仕方ですべての子の人生が大きく変わってくる。他にも、「夫や義理のお母さんと意見が合わなくて離婚したい」「学校へ行かなくなってからママ友の接し方が分からなくて孤独」「コンビニ等の味の濃いものしか食べなくて健康が心配」「孫が不登校で昼間一緒にいるが、何かできることがあるか」といった相談がよせられている。

ひらくでは不登校の先輩の親御さんや本人から話が聞ける。「やることなくゲームばかりで昼夜逆転している」といった悩みに対し、元学校に行けなかった方が「おそらくこんな思いでいると思う」といった具合に、子どもの声を代弁してくれるので、それで安心したり、他の家庭の様子を聞いて安心できたりする。

参加者 学校でも中間教室など対策をしていただいているが、どうしても合う合わないがある。学校以外の学び場を認めていただいたり、出席の扱いも変わってきて「学びの個別化」は進んでいるが、逆に「学びの孤立化」になっている。つまり「自分の好きなことをやってもいい」という時間と場所はあるが、行っても何もないと何したらいいか分からなくて困ることが起きる。また、学校ならお金がかからないが、それ以外の居場所や学びの場に行くと送迎や利用料費用がかかる。自己責任で学校に行かない選択をしている以上仕方がないのか、学校やけやきなど行政が運営する施設で学べる場所がなくて利用しているので費用負担を公的に認めてもらえないか、というところを課題に感じている。

出席の取り扱いも、「ここなら」掲載施設で安曇野市から利用すると、校長判断になって出席が認められるけど、違う自治体来ると出席扱いにならないということが起きている。県のガイドラインに沿って、他地域と連携して認めていただけるようにならないか。

部 長 今は校長判断で、学区外から通っている場合は所属する学校長による判断。

参加者 自然保育の保育園に通った子どもが小学校に入ってなじめずに問題を抱えるということがあるので、小学校との連携を進めてもらえると希望が持てる家族が多いと思う。だが不登校の原因はそれだけでなく、勉強が苦手、学校が退屈すぎる、家庭に問題があるなど多様性があり、全ての子どもが状況や環境に関係なくいられる場所を望んでいるので、早急に対応していただけたら有難い。同時に小学校だけでなく中学校でも対応をしていかないとまた状況が起こる。都市部では小・中・高・大学と選択肢がたくさんあるが、安曇野では選択肢がなく、学区を超えようとするとお金がかかってしまう。

市 長 友人の息子さんも中学校はほとんど不登校だったが、私立高校に入ってからには元気に通い国立大学を卒業した。勉強したいという欲求があれば、高校行って勉強できる。

参加者 本人の前に、親を支援した方がいいと思う。親が落ち着くと、子どもへの対応が変わる。

市 長 親が世間体を気にしているとその態度がお子さんにとっていい方向に働かない。家にいると親が困った顔する、じゃあどこに行けばいいんだとなってしまう。

参加者 うちの子は字が書くのが苦手という特徴があり、小学生からiPad使わせてもらうなど、字が書けないことに対する支援は、十分してもらったが、問題はそもそも学校が合わないということだった。元安曇養護学校の先生がいてくれたときは親ですら分からない、その子どもにとって嫌なことを把握してくれていて、毎日問題なく通え、今まで不登校だった子も全員来れるようになった。

て、先生の技量でこうも違うのかと感じた。完全に登校できなくなったのは中学からで、制服の着用や、規律、受験を見据えた指導などの雰囲気合わなかった。中学3年間は松本のはぐルッポが居心地が良かったようで遠くても自転車で通っていた。ただ週2回しかないため家でんびりすることが多くなってしまった。本人としては勉強は嫌いではないので、中学時代に学びや居場所がなかったのは勿体なかったという思いを今大学生になって感じていなくもない。高校入試や通信制高校の通学、大学受験と困難なことはあったが一つ一つクリアし、大学生になってからは自分の考えをまとめたりすることはむしろ優秀でのびのびやれている。学校とも相談しながら一生懸命対応を考えてきたが、学校としてはこれ以上の対応は無理だし子どもも無理して合わせられないということで仕方なく行かなくなったので、安心して学べる居場所がもっと増えるといいと思う。

参加者 不登校であまり授業を受けていない子に対し、分数の足し算が必要な場面になったら教えようと思っていたが、大学1年生になる今も未だにその場面に出会ってない。高校まではまんべんなくできる子が優秀だが、大学に行くともた違う。大検や通信を使って高校を卒業すれば、大学に行くのはまた別の能力だからそんなに心配しなくていいのではと感じている。

参加者 卒業に時間がかかったとか、中学までしか出てない人で、今立派に生活しているという大人たちが、「それでもいい」ということを言ってくれると子どもたちは安心できる。今はキャリア教育というと「大学までどう行くか」といった考えさせるような感じになってしまっていることに違和感を感じる。もっと大きな夢を描くようにしていけばいいのになと思う。

市長 いい高校や大学行っていい会社に勤める、ということを考えるのがキャリア教育ではない。将来どんな仕事をしたいかという目標持とうという話。伊那市は小中学校で、自分たちの親が「私はこういう仕事してます」という話をするキャリア教育に取り組んでいる。普段見れない親たちの働く姿が分かるので、大学に行く行かない、親の跡を継ぐ継がないに関係なく、具体的に仕事の内容や様子に触れることができる。そういうキャリア教育をやっていききたい。

市長 不登校の生徒数はどうなっているか？

部長 小中学校合わせて全部で300人ぐらいで増えている。ただ、文科省も2～3年前まではとにかく学校行くのを第1にと言っていたが、この1～2年でそうではなくなってきた。こども家庭庁やこども基本法ができたことでだいぶ変わってきた。

参加者 文科省の意向を一般の職員全員にしっかりと伝えて対応してほしい。1人でも分かってない人が対応したときに子どもが大きく傷つく。

部 長 もちろん担任の先生にも勉強してもらうが、今は担任だけが対応するのではなくて、スクールソーシャルワーカーやカウンセラーがサポートするようになっているので以前とは違う。不登校支援コーディネーターが各校にいる。

参加者 そこにも問題があって、中間教室とかもあるが、教員OBが務めていたりすると、学校と変わらない雰囲気で行きにくい子どももいる。コーディネーターが長くいるほどその先生の特徴が出て、合うかどうかの問題が出てくる。

参加者 不登校支援会議も当事者の声が届いているかが疑問で、子どもが4年間不登校だがそこから聞かれたことがない。当事者の困り事と、先生や学校側の対応の困り事っていうのは違う絶対違うので、先生と市のコーディネーターと支援会議だけだと、解決できる問題が違う。なので、そういう会議に当事者が入れる機会を作っていたら嬉しい。

市 長 それは大事なところだと思う。

参加者 県の会議では当事者の小学生が発言していて、大人の自分よりも立派なこと言っている。本人が意思表示をする場は本当に大切に、本人や親をぜひ一緒に考える場に呼んでもらいたい。子どもにとってありがたい場所にしないと、居やすい場所にはならない。

部 長 ちなみにけやきはどんな感じか。

参加者 雰囲気が学校と変わらないので、うちは利用したいと思わない。中間教室は教室に戻すことが目的なので、それを目指していない保護者や本人にとっては、まず選択肢ではなくなるが、けやきもどちらかというところという感じ。あと高学年になると電車で行ったりできるが、低学年だと親の送迎が必要。また、うちに限っては、そこで何をしたいか分からない。好きなこととしていいだと、家にいてもいいんじゃないのっていう話になるので、イベント的なこと、例えば科学の実験や折り紙など、「こういうことをする」というのがあれば、それが合う子が集まってくると思う。

子どもの権利条例と居場所づくり

参加者 いざ「行かなくてもいいよ」となると「じゃあどうしたらいいの」となるので、その道に秀でた大人が楽しそうに趣味や仕事を紹介して子どもと一緒に取り組めると、良い学びになるのではない

か。どうしても学校に行くことが一番と大人が思っているから子どももそう思ってしまうが、文科省が言っている「いろんな場で学んでいい」ということを社会が認めないと子どもたちが苦しむ。そういったことを安曇野市として後押しするには条例が一つの手段と考えている。

市長 共生社会づくり条例の時も関わってもらった弁護士の方が「次は子どもの権利条例を考えましょう」って言ってくれたので、考えようと思っている。いずれはやらなきゃいけないが、まだ勉強が足りないため時間をかけて検討していく必要がある。

参加者 条例を作ることで子どもの居場所や相談窓口の設置や整理になると考える。西野さんに「なぜ居場所だけでなく条例を作ることにしたのか」と聞いたら、「居場所は公設民営なので、首長や方針が変わっても居場所が継続できるよう、条例や法律で縛った。」「子どもと一緒に作っていくことにこだわった」とおっしゃっていた。権利条約でいうと子どもが権利の主体なので、条例を作るときは一緒に考えることが重要と考える。また困っていることを子ども自身に相談してもらうには、電話よりも、居場所で何かしながらの方が話してくれやすいと思う。

市長 自然保育と通じるところがある。明科北認定こども園で熱心に自然保育やっているが、小学校との連続性が難しい。今までこども園と小学校と所管する部局が違ったが、去年教育委員会にしたので、連続性を考えていきたいし、学区の縛りははずす話もあるので、今後考えるべきところ。

市長 川崎の子ども夢パークはどんな施設か。

参加者 洞合公園みたいな公園のベースで、駅が近くにあって、建物があって不登校の子が来たり、一般の子ども連れや保育園児が遊びに来る。大人は干渉しすぎないことになっていて、自己責任で火をおこしたりできるし、怪我もする。

市長 川崎以外の人口10万～20万の都市で、公的な関与による居場所作りをやってるところをご存知か。

参加者 町田市。公園の中に火を起こせる場所があったり、工作できたり、食事を作れたりして、子どもが勝手に集まって遊べて平日でも誰でも利用できる。

参加者 立派な建物を新たに作るのではなく、今あるものを利用できたらいいと思っている。

参加者 居場所に行くときにはあずみん・のるーとといった交通手段を使えて、お昼ご飯があるってなると、親もだいぶ安心できると思う。交通と食事が学校行かない家庭が困るところ。

市長 中学生くらいなら自分でどうにかできるけど、小学生は困る。学校ならお金を払うけど給食は出る。それが家にいるから、親がお昼を考えなさいって言われても困る。

参加者 例えば近所の人がお昼作りに来てくれたり、子どもたちが一緒に作る場になればいいと思う。田畑を手伝いたい子どもや、料理作りたい子は毎日手伝うとか。ただ怪我しても自己責任っていうルールをしっかりと決めて市が責任を負わないようにした方がいい。

市長 子ども中心のコミュニケーションみたいな感じ。行政は場が提供できても、運営は市民に関わってもらわないと無理。また安曇野は開発の制限が厳しく、新しい場所で何かやるのが困難。

参加者 まずはけやきをうまく利用できないか。スタッフの専門性も重要で、誰でもいいわけではない。

参加者 選択肢がないのでどこに行っても同じ。例えば元先生と同じ方がいつもいらっしやると、合う合わないの問題が出てきてしまう。

参加者 本当は大学生が関わってくれるといい。祖父母世代だと何で学校行かないんだと思う人が多い。スタッフの方にも不登校の子どもたちということを前提として伝えておく必要がある。

市長 松本短大が市と連絡協定を結ぶということで、保育学科の方にお手伝いをお願いすればやってくれるかもしれない。

部長 コロナで止まってそれきりだが、松本大学の学生がけやきには夏休みに来ていただいていた過去がある。

参加者 どんな場や運営がいいのか当事者や市民も含めて考える場をぜひ作っていただきたい。

参加者 例えば南農で農業に、穂商ではプログラミングなど情報処理の方に特化したプログラムを開いてもらって、子どもも参加できるようになればいい。

市長 県教委と話をすることはできる。

市 長 今日だけでは話が詰まらないところがあるので、教育委員会でお話を伺って進めていければ、
どういう形で進められるかをまず検討する必要がある。

参加者 場所は何かいろいろありそうだが。

市 長 場所もいざ探すとなかなかない。やはり駐車場の問題や夜も使えるかとか、といった問題がある。
あと管理をどうするか。自己責任と宣言して、ケガしても勝手にやったことだからって言い張ることは実際には難しい。

参加者 いきなり大規模にやるのは無理なので最初は週1回・月1回くらいで小さく始められたら。

市 長 洞合はピッタリだが交通手段が難しい。いざ考えると良い場所がなかなかない。よく会議などで
「安曇野は広くて、土地いっぱいあっていいですね」と言われるが、農転農業地は厳しい制限があ
ってなかなか利用ができない。

参加者 かじかの里は駅も近くていいと思う。室内施設もあってこじんまりとできる。

参加者 利用のルール作りをどうしたか、西野さんに聞きたい。川崎市は骨折ぐらい普通にありそう。

市 長 ぜひ聞きたい。実際事故が起こった時、どうやって処理してるか。

部 長 1件でも事故起きると大変なことになる。

参加者 子どもに対する認識を大人がいろいろ変えていく必要がある。人の責任にしたり、誰かがやっ
てくれるというようなことをしていると、結局子ども自身が楽しくやりたいことができなくなってく
る。そういう社会を大人が作っていることを認識する必要がある。

参加者 県内にも伊那小学校みたいな学校が3校あったが、結局「遊んでばっかいて、勉強させなきゃ
いけないんじゃないか」と親たちに言われて無くなったそう。やはり周囲の大人がどう考えていく
かということが重要で啓発が必要。

市 長 昔だったらお寺の境内だとか、外で遊ぶ場所がいっぱいあったが、最近遊んでる子どもがいな
い。晩御飯前に野球をやったり、冬は学校のそばの田んぼに氷張って遊んだり。ある時冬休みに
注意書きが出て、「勝手によその田んぼに水をはらないように」って。

参加者 そういう寛容さが社会に必要。でないとしめつけが子どもにいつている気がする。そんなその辺は条例で何かメッセージ出せないかなど。

市長 子どもの権利条例は相当丁寧に進める必要があるので、すぐには無理だが、勉強を始めてほしい。

課長 松本市と県が長野県の未来を担う子どもの支援に関する条例を出してる。

市長 基本的には虐待・体罰・いじめについてで、いじめとか体罰に対する方が強い。不登校のことは考えてはいるんだろうけど表面には出てきていない。

部長 はぐルッポはどう思われるか。

参加者 とてもいい場所。庭は無いが、隣に公園があって、教員住宅の2部屋を繋げて運営している。

部長 たとえばの話だが、場所や光熱費は市で負担するとして、空いている教員住宅を使って居場所づくりをするのはどうか。公園が近くにあるかは要検討だが、それならあまり時間がかからずに取り組めるのではないか。

参加者 改修もやって良ければ、それ自体が学びになる。自分たちでペンキ塗りをやって、どのぐらい費用がかかるのかの計算も子どもがやればいい。

参加者 排水溝とかエアコンとか基本的なところは改修してもらった方がいいが、市民の手でできるところは市民を巻き込んで作業し、その場所を知ってくれる人を増やすことで、こういった居場所が大事なんだ、という認識を持った大人を増やすことにつながる。

市長 私がショックだったのは長野県で母子家庭、父子家庭の子どもとったからアンケートで、「本当は医者になりたいけど、うちの家庭では無理だから諦める」と小学生が書いていたこと。何とかしようと少しずついろんな形で子どものサポートをしようってことで動いている。親の経済状況とか家庭状況によって子どもが夢を諦めちゃいけない。チャンスのくじを引く前に降りてしまうようなことは絶対駄目。

参加者 Education Beyondという団体が、アドバンス・ラーナー向けのプログラムを夏休みにやっていたが、そういうものに参加するチャンスをいただければ、申し込みたい子はいる。また市のプログラムは親子で参加が絶対など制限があるが、子どもだけで参加できるという。

市長 いろんなことを考えていく必要があるが、この問題は教育委員会からいい提案が出ることを期待している。最近結構市職員からの提案が実現している。

参加者 他の市の様子が分かったらお伝えする。

市長 人口数万、最大20万くらいの市のモデルがあればぜひ教えていただきたい。